2025年度　公募推薦選抜問題（90分）
Ａ　日　程　11月９日(土)

基礎学力テスト

英　　語 ……………………………………１～８ページ
数　　学 ……………………………………９～13ページ
国　　語 ……………………………………15～28ページ

注　意　事　項

１．試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。
２．上記の科目から２科目選択してください。
３．解答用紙には，英語・国語(赤色)・数学(青色)の３種類があります。
４．試験開始後，解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し，受験番号をマークしてください。
５．解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。
６．問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが，解答用紙を汚してはいけません。
７．試験開始後，問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
８．数学の問題の冒頭には「解答上の注意」が記入されていますので，必ず読んでから解答してください。
９．解答済みの答案は，２科目重ねて提出してください。
10．不要になった解答用紙も回収します。
11．試験終了後，問題用紙は持ち帰ってください。

国　語

1　次の問い（問1～3）に答えなさい。

問1　ア～ウの傍線部のカタカナに相当する漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。［1］、［2］、［3］

ア　業界再編をキトして合併・買収を繰り返す。［1］

①帰　②棄　③企　④規

イ　市のPRキャラクターの愛称をコウボする。［2］

①暮　②募　③墓　④慕

ウ　両者の実力はハクチュウしている。［3］

①泊　②迫　③拍　④伯

問2　ア～エの四字熟語の空欄［4］～［7］に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。［4］、［5］、［6］、［7］

ア　彼女は［4］刀直入に用件を切り出した。

イ　逃亡した詐欺グループを一網打［5］にした。

ウ　古典作品を換骨奪［6］して小説を書く。

エ　各国は呉越同［7］の精神で協力する必要がある。

①回　②短　③尽　④集　⑤人

⑥舟　⑦体　⑧単　⑨胎

問3　ア～ウの筆者の著作を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。［8］、［9］、［10］

ア　五木寛之（いつきひろゆき）［8］

①『街道をゆく』　②『青春の門』　③『深夜特急』　④『アド・バード』

イ　坂口安吾（さかぐちあんご）［9］

①『火垂るの墓』　②『堕落論』　③『裸の王様』　④『草の花』

ウ　会津八一（あいづやいち）［10］

①『海やまのあひだ』　②『道程』　③『鹿鳴集（ろくめいしゅう）』　④『桐（きり）の花』

2 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

「共生社会」を考える際の出発点は、社会的位置を異にする人々の共生です。現代社会で人々が住んでいる家や場所、経済水準、教育水準、寿命や健康水準はさまざまでありますし、性や年齢、人種や民族、宗教等によって機会や処遇に歴然たる差異が存在します。「共生社会」はこうした差異の現実に目を向けることから始まります。

ただ誤解がないように述べておきますが、「共生社会」は各自の考え方や生き方なども含むあらゆる差異を否定したり、無理矢理に統合するものではありません。差異にともなう機会や処遇の不平等を問題にしているのです。特定の文化や(注)エスニシティ、性差、世代であるという理由で不利益を被ることのない社会の可能性を「共生社会」は模索しているのです。エスニシティや宗教、国籍を異にする人々の間での共生は現代的なテーマです。社会保障費の負担の公平性が論じられるなか、高齢者世代と若者世代の世代間共生はホットな話題です。性差を超えた共生、弱者やマイノリティとの共生、諸外国との国際的な共生なども語られています。

では次のような場合は「共生社会」といえるのでしょうか。A<u>ここでひとつの事例を紹介してみたいと思います。</u>アメリカの医療世界の格差の話です(Milner,1980)。ある地域の市民の医療を担う病院に二つのタイプがあります。ひとつは民間医療保険を利用する経済的に裕福な市民層を主として受け入れ、設備も整っており高度な医療サービスを提供する病院です。もうひとつは主に救急患者や貧しい市民を受け入れ、医療サービスも限定的で施設も古びた病院です。市民の経済格差と病院格差の対応関係が地域医療世界に構成されているのです。ただし病院は互いに無関係に存在しているわけではありません。地域医療の世界で棲(す)み分けをしかつ互いに助けあってもいます。豊かな市民を受け入れる一流病院は貧しい人が頼る救急病院に医師など人材派遣や医療技術・情報の提供をはじめとするさまざまなサポートをおこなっています。救急病院からはそれに見合う返礼はありませんが、貧しい市民が一流病院に押し寄せる防波堤の役割を果(はた)しています。両者は一種の「共生関係」にあるというわけです。「共生」でなくて「共棲(きょうせい)」と表記した方がぴったりするかもしれません。異質なタイプの病院間の共生・共棲関係を見出(みいだ)した点は社会学的には興味深い研究ですが、ただ「共生社会」のあり方を考えようとする者にはおそらく不満が残るのではないでしょうか。こうした共生は［　　］と感じるからです。「共生社会」を語る人は、現状維持的な共生ではなくて、だれしもがいい治療を平等に受けられるような医療制度やシステムを構築するにはどうすればいいのか、という問題意識をもっています。

その際、B<u>論点となることがあります。</u>それは共生の対象をどの範囲内の人々に画定するのかということです。人間の世界は一定の社会秩序を維持するために、線引きや境界設定を行います。境界設定自体は恣意的なものですが、境界がひかれますとその内側の人は共生の対象となっても、外の人は無視されます。たとえば、日本に暮らす外国人との共生ですが、一口に外国人と言いましても多様です。正式な手続きを踏んで入国した外国人だけでなく、いわゆる「違法滞在者」や難民もいますし、長期滞在者や一時居留者、またエスニシティや人種、滞在理由も多様です。こうした多様な外国人すべてとの共生を考えているのか、それとも正式な入国者や滞在理由が就労や入学など明確な人だけに限っているのでしょうか。曖昧なままに外国人との共生が語られることが多いのですが、安易な線引きは一部の外国人の排除につながります。あるいは年金や医療・介護保険の財源の負担をめぐる議論では、高齢者世代と現役世代に区別し、両者の共生の必要性が語られます。しかし今後は高齢者でも働き続ける人が増えてきますし、若者世代でも職なしや不安定な雇用状態が長期化している人もいま

す。年齢で機械的に線引きして高齢者＝受給者、若者・成人＝負担者と単純に考えることはできなくなります。年齢ではなくて実質的に年金や保険の費用を負担できるのはだれかという点で考える必要があります。いずれにしましても「共生社会」は人々の社会的位置の差異にともなう不平等や不利益を是正しようとするものですが、差異は機械的に判断できるものでも自明なものでもありません。人々の間にどのような線引きをするのか、だれとだれの共生を語っているのかについては常に慎重さが求められます。

　次に「共生社会」は不平等や不利益を被っている人、異質な人々を包み込んで共に暮らすことを目指すわけですが、そうした社会の制度やシステムを維持するにはそれなりにコストを要します。そのコストを社会はどのようにだれが負担するのかを考えなくてはなりません。経済的側面つまり共生に必要なコストを抜きにした「共生社会」の論議はどこか空虚です。子供の養育や高齢者介護をこれまでのように各家族が担うのではなくて、家族から外部に社会化して地域社会の保育や介護施設、ボランティアに委ねることも可能です。その場合にも一定の費用を要しますので、だれがどのように負担するのかという論議を避けて通るわけにはいきません。国内で働いている外国人労働者は単なる労働力ではありません。彼らを生活者として扱うならば市民と同じように暮らせるようにする必要があります。それには医療や福祉、教育などのサポートが必要です。外国人労働者を雇用する企業は安価な労働力を享受しても、外国人家族の生活の支援に必要な経費は地域社会や公的組織に外部化しているのが現状です。「共生社会」は具体的な制度やシステム、協同行為を通じてはじめて実現されるものですが、それらが持続的にまた有効に機能するために、経済的基盤をしっかりとしたものにしておく必要があります。

C「共生社会」の経済的負担をだれに求めるのかということは意見の分かれるところです。各自がみな自分の費用を負担できればそれに越したことはありませんが、「共生社会」の論議は人々の社会的位置は多様で経済的に豊かな人も貧しい人もいるという前提に基づいています。自助できない人を包み込んだ「共生社会」の制度やシステムの設計を模索しているのです。自助や自己責任を強調するだけでは解決できない問題です。

　自助に限界があるとすれば、あとは共助か公助ということになります。共助はむかしからの知恵です。頼母子講（たのもしこう）や多くの移民居住地域の相互扶助組織などその例ですが、その現代版は民間の介護保険や共済制度、生協組織、ボランティア組織です。他方、公的資金に依存することもできます。もっとも公的年金や介護保険など社会保障の財源は税金に基づくものですから、各自が応分の負担をしていることになります。小さな政府を目指す人たちはできるだけ公的出費を避けて負担を共助に委ねようとします。日本での社会保障関係費は増え続けており国の財政健全化が求められ、公的負担の抑制への政治的圧力が強いことはご存じの通りです。公助がだめなら共助に頼ればいいということになります。しかし共助の限界やその安定性に不安を感じる人も少なくありません。民間の介護保険に加入しても、必要なときに必要なサービスを本当に受けられるのか不安に感じている人も少なくありませんし、加入したくともその余裕のない人もいます。やはり公助は必要であり、大きな政府が望ましいという人も少なくありません。

「危機」に瀕（ひん）しているといわれております公的年金や医療・介護保険など社会保障制度について、社会保障論や財政学の専門家からD改革のアイデアやプランがいろいろと示されています。外国の特定の制度を理想のモデルのように紹介する人もいますが、歴史や国の規模、文化的背景の異なる国の公的年金や保険制度を単純に比較することはできません。それに比べれば、専門家のプランは公的年金や保険制度の持続や安定化にどれだけ有効であるのかについての試算も示されています。ただ給付水

準を下げてでも年金や保険制度の安定性を維持し、社会保障費の増加を抑えなくてはならないという冷静な試算を多くの人は簡単には受け入れないのが現実です。財政上の困難は理解しても、自分が不利益を被ることは避けたいというのが多くの人の心情であるとすれば、その点も含めてどのように変えていくのかという論議が必要です。

（宝月誠「共生社会を目指して」〔福留和彦・武谷嘉之編著『共生社会論の展開』所収〕による。なお、本文中に一部省略と改変したところがある。）

（注）　エスニシティ――共通の出自・習慣・言語・社会的価値観などをもつ集団に属する人がもつ、その集団への帰属意識。

問１　傍線部Ａ「ここでひとつの事例を紹介してみたいと思います」とあるが、筆者がこの事例を取り上げる理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 11

① 社会保障の負担の平等性は、共生について考えるうえで避けて通れないテーマであり、それについて読者に考えを深めてもらうために都合がよい典型的事例だから。
② 現時点では社会的格差などのさまざまな障害が共生社会の実現を妨げている実状があり、社会的格差の具体的な内容について理解を促すための理想的事例だから。
③ 民族や性別、社会的立場の違いなどを乗り越えて共生を実現することはかなり難しい課題ではあるが、それを可能にするヒントを見出すことができる事例だから。
④ 異質なタイプの病院が、互いに助け合うことで地域医療を推進させた事例を取り上げ、「共生」には「共棲」というあり方も考えうると問題提起をするため。
⑤ 「共生」を目指して一定の成果をあげた事例ではあるものの、共生社会のあるべき姿を考えるうえで不可避な課題が浮かび上がってくる事例でもあるから。

問２　本文中の空欄に入る表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 12

① 市民の経済格差を解消することに貢献しないのではないか
② 患者の社会階層の差異を前提にし、それを再生産するだけだ
③ 一時的にうまくいっていても、汎用的に持続可能なシステムではない
④ 利益を受ける側が一方だけに偏っているため平等といえない
⑤ 病院が実質的に患者を選別するということは医療福祉の精神に反する

問3 傍線部B「論点となることがあります」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①〜⑤の中から**二つ**選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。 13 、 14

① 共生社会は具体的な制度やシステムなどを通じて実現されるものだが、それらを持続的に機能させていくための財源を、誰がどのように負担するかについての社会的合意をはかること。

② 共生を考える際には必ず何らかの形で線引きがなされ、その範囲から外れた人は共生相手とは見なされず無視されてしまうという現実があり、その恣意的な線引きの是非が問われるということ。

③ 共生社会について考える際は、だれとだれとの共生を考えるのかということを明確にしなくてはならず、日本で暮らす一般の外国人と、難民として入国した人とが共生していく必要があるのかは判断が分かれるということ。

④ 社会的位置の差異は明白なものではなく、機械的に線引きを行ってしまうことで、境界外の人を排除することになるため、差異に伴う機会や処遇の不平等を助長する可能性をはらんでいるということ。

⑤ 共生とは基本的に人々の社会的位置の違いによる不平等を是正しようとするものであるが、格差の種類も多岐にわたり基準も曖昧なため、何をもって社会的弱者とするか議論が必要だということ。

問４　傍線部Ｃ『共生社会』の経済的負担をだれに求めるのか」とあるが、これについて筆者の意見を整理するために、様々な負担のあり方の特徴を高校生が次のような【メモ】にまとめた。空欄［Ⅰ］、［Ⅱ］に入る内容として最も適当なものを、後の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。［15］、［16］

【メモ】

「共生社会」の負担のあり方について
・自助…各自が自分の費用を負担する。経済的に豊かでない人との共生を目指すうえで、現実的な限界がある。
・共助…古くは頼母子講、現代では民間の介護保険や共済制度など。［Ⅰ］といった点や、経済格差により立場に優劣が生じるといった問題点がある。
・公助…公的年金や介護保険などの社会保障制度。［Ⅱ］といった問題点がある。

Ⅰ　［15］

① 小さな政府を目指す人があらゆる負担を押しつけようとする
② 公的権力の影響を避けられないため現実的な自律性に欠ける
③ 公的な制度に比べると基盤の確かさや信頼性には疑問が残る
④ 加入者の負担に基づいて運営されているため確実に財源が確保できる
⑤ 営利目的の民間組織のため深刻な有事に十分な助けにならない

Ⅱ　［16］

① 社会保障費の増加が財政を圧迫しても、年金等の給付額の引き下げは容認されにくい
② 外国の制度を基に作られているため、国の規模や文化の違いから現実との齟齬が多い
③ 国の財政を持続可能なものにするためには、社会保障費の負担増が避けられない
④ 各人が均等な額を出し合うことで維持される制度のため、貧しい人ほど負担が重い
⑤ 財政難で負担金額が上がる不利益を避けるため、保障される給付額が減りつつある

問５　傍線部Ｄ「改革のアイデアやプランがいろいろと示されています」とあるが、高校生５人がこれについて、本文と次に示す〈文章〉（本文とは別の部分を同著から抜粋したもの）を読んでそれぞれ読み取ったことを話し合った。それぞれの内容をふまえた発言として最も適当なものを、後の①～⑤の中から一つ選びなさい。 17

〈文章〉

「学術的なものから一般書まで」多くの書籍が発行されていますが、本書も含めて幅広い専門家の学際的な内容のものが少なくありません。このようなときに議論の土台となるのが共生に対するイメージなのです。哲学や教育学をはじめとする人文科学、経済学や社会学、社会政策学をはじめとする社会科学、農学や自然環境分野をはじめとする自然科学などが同じテーマで議論することはなかなか難しいことですが、その必要性は多くの研究者が感じています。現代社会において私たちが直面している課題は非常に複雑で、ひとつの(注)ディシプリンでは解決できないということがあるからです。一つひとつの課題に対してはそれぞれ専門的な検討が必要ですが、その課題の裾野の広がりは別の知見を要請するということもあります。例えば地球温暖化問題と持続可能な開発が関連することは直感的にわかります。しかし同時に持続可能な開発と、古くは南北問題といわれた経済格差の問題は密接不可分です。そしてそれは出稼（でかせぎ）労働者や移民の問題につながります。当然、貧困層や移民労働者子弟に対する教育問題に拡（ひろ）がっていきます。このように考えれば、気象学、経済学、政治学、さらに教育学や心理学、そして社会学といった、これまで全く違った分野と考えられてきた知を結集しなければ問題の全体像を正しく理解することができません。もちろん、それぞれの課題にそれぞれの専門家が真剣に取り組んでいます。それを他の分野の研究者がすべて理解することはできません。何か共通の切り口があって、その切り口に沿って意見を交わすことで議論を始めることができるのです。その有望な切り口のひとつが共生です。共生を共通のキーワードとすることで相当に大きな問題意識のなかで個別の専門知識を共有する土俵が生まれるのです。

（宝月誠「共生社会論はどこへ向かうのか」〔福留和彦・武谷嘉之編著『共生社会論の展開』所収〕による。）

（注）　ディシプリン――学問分野、専門分野、学科。

① Aさん…本文と〈文章〉は、どちらも共生の実現のために、幅広い専門的知見が必要だと述べているね。立場の違う人同士が共に暮らす社会を考えるうえで、当事者たちが各々の立場から声をあげて、意見を出し合うことが大切なんだね。

② Bさん…本文では社会学や財政学の専門家による社会保障制度改革プランが、有効性についての試算も示されている点から、好意的に評価されているよ。彼らのプランに耳を傾け、共助への切り替えを図っていくべきだと言いたいんだよ。

③ Cさん…〈文章〉で挙げられている「南北問題」などは、歴史的背景が貧困を生み出す典型例だね。こうした格差を是正し共生を目指すには、総合的な知識をもつ専門家を集めて、対策を練る必要があるんだと分かったよ。

④ Dさん…本文でも〈文章〉でも、共生を考えるうえで境界が引かれてしまうことの危険性について筆者は述べているね。境界の外側は無視されてしまうことになるので、密接不可分の問題と切り離して論じてはいけないと主張しているよ。

⑤ Eさん…〈文章〉では、学際的な議論の必要性が主張されているね。共生という共通意識に基づいて、様々な分野の知恵を結集することで、多角的な視点から差異に伴う機会や処遇の不平等を緩和していく改革プランが求められているんだね。

問6 本文の内容と**合致しないもの**を、次の①〜⑤の中から一つ選びなさい。 18

① 日本で働く外国人を単なる安価な労働力と見なし、医療や福祉などは無視してきた日本企業の現実を省みて、彼らの生活を支援する制度やそのための経済基盤を構築していく必要がある。

② 財政の専門家による社会制度改革のプランは、学術的な試算に基づいており、一定の効果が期待できると考えられるが、自身の不利益が先行してその計画をよしとできない人も存在する。

③ 民間の保険制度は公的な社会保障費を抑え、小さな政府を目指すうえで有効な共助システムのひとつといえるが、経済的に苦しい立場の人はそもそもそれに加入できないという問題がある。

④ アメリカの格差の大きい二種類の病院間の関係は、共生社会を考えるうえで課題を含んではいるものの、貧困層にも一定の医療サービスを提供できるという点で、地域医療の世界で共生社会の一助になり得たことを示す例といえる。

⑤ 年金などの社会保障制度において、若い世代が多数の高齢者を支える形になるため世代間の不公平が問題視されており、特定の世代が一方的に不利益を被ることのない共生システムの模索が求められている。

3 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

終戦の夜はいい月夜だった。あたりはしいんとしていた。その静かさは、人々がまだこの事態の推移のゆくえがわからぬまま、それぞれの住いの中で今朝までの空襲の緊張からは一応解かれて、まだ、もの音は立てないでいる、といったものだった。家々の電灯もまだ暗いままだった。

「もうその（注1）カバー、とれよ。」

と、夕飯のとき夫の武二が言った。妻の安子は、大豆飯を二人の子どもの茶碗によそいながら、

「まだいいわね。あんまり（ア）現金なとおもわれる。」

と、言った。

姑も子どもたちももう蚊帳を吊って寝ていた。

「おばあちゃん、もう今夜からゆっくり寝られるわね。もう空襲、ないわよ。」

「えらいこっちゃったね。そいでもまあ、焼けもせなんでよかったわえ。年寄りにゃア、辛かったわえ。」

姑はもう齢のためかすれて慄えるような声でそう言い、孫を抱いて早くから床へ入った。

床の低い縁側へ出て武二は煙草を喫っていた。安子はまだもんぺのままそのそばに坐った。狭い庭に這わしたａ南瓜の葉が夜露に生き生きとなったように旺盛に葉をひろげていた。まっすぐに上をむいてひろがっている南瓜の葉で縁さきは蔽われていて、月の光りがその上を鉛色に明るくしていた。見上げると、空は千切れた雲を浮かして深い紺色をしていた。昨日までこの空に鉄や火が散った、ということにいささかの関りもない色をしていた。

「工場はどうするの。」

と、安子は夫の何か考えている顔へ問いかけた。

「鍋でも作るさ。」

「Ａへえ、そうかね。」

さっき電灯のカバーさえ、あまり現金なとおもわれる、と言った安子は、工場の切りかえの早さに、はっとする思いであった。生産というものを自分たちの生活から切り離して考えることに慣れてきて、戦争が終ったとたんに鍋が作られる、と聞くと、安子は生産とはそういうものであった、と改めて気づかせられたような気がした。

安子は夫の太い神経に今夜も信頼を寄せていた。Ｂ長い戦争の間にこの夫婦の生活もいつとなしに色合を変えていた。武二はこの町の鉄工場に通っていたが、（注2）徴用工などとちがって、いっぱし顔もきく地位になって、戦時中に却ってこの夫婦の家庭は、調うものもととのったというふうだった。夫婦は、この戦争が日本の侵略戦争だということを知らないわけではなかった。武二は出征する工場の若い職工などにも、秘かに、死ぬな、と言ったりした。安子はそういう夫の言葉を、うなずいてかたわらから強めた。そういう中でこの家は、いわゆる市井の生活者の体裁をととのえていった。安子ははじめて黒の紋つきの羽織も作った。紋つきの羽織を着るときが多くなっている生活だった。仲人などをすれば、世間のしきたりに添わねばならず、また、そうすることで普通の生活にまぎれ入ってゆこうとしていた。武二も、また安子も二人が一緒になった前後は、まだ（注3）特高の刑事が玄関に、こんちはァ、と独特の声音で靴音をとめる、そんな目にあってきた。狭い町では警察の目も近かったが、また夫婦の有りようもそれだけ彼らに見えた。が、家の中では夫婦は、互いに本心を見せ合って、そのためにどこかで却って安心して、次第に変ってゆく自分たちの暮らしの色合いに狎れ合った。

「あんた、とうとうアメリカと戦争することに決まったとさ。」

もう起きて台所の火を燃やしていた安子は、隣りの豆腐屋のラジオに耳をすましてから夫を起した。

「そうか。」

武二は床の中に腹這いになって、ゆっくり煙草に火をつけた。

「まさかやるまいとおもったが、今に負けるぞ。」

「Cどうして、そういう気になるだろうかね。そんなに自信があるんだろうか。」

安子は、世の中がその戦争に簡単に沸き立ってゆくのをみていると、自分たちがよっぽど太々(ふてぶて)しいのかとおもうことがあった。

武二の工場での地位はこの間にだんだん上に立つものになっていったのだ。国民服に戦闘帽をかぶって出かけてゆく武二の肩は、中年者らしい落(おち)つきになっていた。彼が古道具屋で見つけたと言って、山水の掛け軸を買ってきたとき、安子は、bへえ、と言ってちょっと彼をからかうような目をしたが、それが家の中をかざろうとする夫の気持(きもち)だとおもうと、安子もむげに笑ってしまうことは気の毒で、今まで子どもの玩具や絵本や雑誌類を積み上げてあった床を片づけて武二がその掛け軸をさげるのを、

「ほら、おばあちゃん、うちの床の間も立派になったわね。」

と、夫の仕草を(イ)はやすように言った。

武二はときどき酒をのんでも帰って来た。が、また工場での配給ものなどは、重い風呂敷包みを抱えて運んだ。

「いらんわね、こんな高いもの。」

妙に白茶けた鉄の、ぶどうの浮き模様のある花器などまで買ってくるとき、安子はそう言ったが、武二は不機嫌になり、

「お前はなんでも人のやることに(ウ)水をかけるな。いいさ、これだって、買っとくだけ得だ。」

安子は夫のそういう執着ぶりに疑問を感じることがないでもなかった。少(すくな)くとも安子は女の感傷で、出征兵をおくる歌声の街中に聞(きこ)えているのに泣いた。だからわが家に茶棚の運びこまれるとき、彼女は隣近所に気兼ねを感じた。武二はそういう神経をちっとも払わないようにみえた。

「なアに、今は、景気のいいようなことを言ってるが、あとで収拾がつかなくなるさ。みてろよ。」

戦争に対しては、武二はまだそう言っている。すぐそのあと、

「お前も、そんなぶさいくな頭をしてないで、パーマネントでもかけろよ。」

「ふん。」

安子は、はにかんだようにうつむいたが、その瞬間に自分たちの生活を見つめる思いも心のうちにはわいていた。が、それは夫に言えば、折角妻を見つめている彼の目をはねのけることになりそうだったし、また安子のうちにもcこの場の空気をそっとしておきたいものもあるのだった。だから安子はそのあとでパーマネントをかけた。

工場の出張で、武二が満洲(まんしゅう)へ行くときは、それが世間に通る自慢になって、安子もいそいそと仕度をしてやった。武二はそこから帰ってきたとき、こまごまと二人の女の子のセーターや靴や、安子の浴衣から足袋まで買ってきた。

「あんまり人にやるなよ。せっかく重い思いをして持ってきたんだ。」

安子が近所どなりへ、石鹸(せっけん)やタオルを配るのに、武二はその細おもての、dこの頃色艶のよくなった頬をふくらせて、厭(いや)な顔をした。

「いいじゃないの。喜ぶわよ。」

「なに、そういうもんじゃないよ。よっぽど買占(かいし)めて来たろう、って、かんたぐるさ。」

「そうかね。」

「そうさ。お前はおめでたいから。」

安子は、そういうこともあろうか、と夫の言葉にうなずかれるところもあり、折角配った品物に人の蔭口（かげぐち）を想像すると、ふん、というような気になって、そして味けなかった。こういう味けなさを武二は感じないで自分ひとりが感じるということに安子は、何だか自分の考えとはちがった生活をしている、と世間の気分もひっくるめて寂しい気がした。

だから戦争が激しくなり、空襲があるようになって、一般の生活が少しの余裕も持てなくなると、安子は e 却ってどこかで気楽になった。武二の工場も空襲の目あてになるにちがいないし、だから、毎朝夫をおくり出すときも、

「あんた、気イつけてエ。」

と、親身な心づかいがわき、互いの気持も寄り合うようであった。

（佐多稲子「あるひとりの妻」『戦後短篇小説選1』所収）による。）

（注）1 カバー――戦時中は「灯火管制」が敷かれており、各家庭の光が外に漏れないようカバーをつけていた。

2 徴用工――戦時下に国家が労働力として軍需会社に動員した人々。

3 特高――特別高等警察。国家の存在を否認する者や過激な共産主義者などを取り締まった日本の旧制度下の秘密警察。

問１　傍線部（ア）～（ウ）の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。［19］、［20］、［21］

（ア）現金な　［19］
① 俗世間にまみれている
② 考え方が現実的である
③ 状況で簡単に態度を変える
④ 金銭的利益を追求する
⑤ あからさまで羞恥心のない

（イ）はやすように　［20］
① からかい交じりに
② 馬鹿にする口調で
③ 皮肉をこめた表現で
④ 大げさにほめ立てて
⑤ うわべだけ賞賛して

（ウ）水をかける　［21］
① 意地わるく批判する
② 否定的な目で見る
③ 興ざめさせる
④ 冷たい言動を見せる
⑤ 冷静に評価を下す

問２　傍線部Ａ「へえ、そうかね。」とあるが、これは安子のどういう心情を表しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。［22］

① 戦争に負けたことを思い嘆く様子もなく、これからは鍋でも作って暮らしていくという夫の現実的な言葉に、平和を嬉（うれ）しく思うよりもむしろ複雑な思いを抱いている心情。
② 戦争が終わってもとの日常生活が戻ってくるのだという実感をようやく得るとともに、それに対応していこうとする世の中の柔軟さや人間のしたたかさに改めて驚く心情。
③ 戦争が終結したばかりだというのに、既に工場の今後を考えていた夫を嫌悪する一方で、実生活に向き合い生計を立てていく日々が戻ってくるのだと喜ぶ心情。
④ 戦争が終わって日常の生活が戻ってくるということは嬉しく思うものの、あまりに急激な変化に戸惑い、敗戦の実感が得られず、まだ現実についていけていない心情。
⑤ 戦争が終わるとともに夫の工場の好景気も終わってしまうのだということに思い至り、これからは鍋を作って細々と暮らしていくのだとどこか気落ちしている心情。

問３　傍線部Ｂ「長い戦争の間にこの夫婦の生活もいつとなしに色合を変えていた。」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 23

① 軍事国家への道を日本がつき進んでいき、世の中が貧しくなる反面、工場の仕事には大きな利益がもたらされ急速に豊かになっていったために、日本の侵略戦争であると認識してはいるものの、この現状が続くことを願うようになっていったということ。

② 家の中では戦争に批判的な意見を交わすこともあったものの、それを外に見せ特高に目をつけられるようなこともなく、平凡な市民としての豊かで落ち着いた生活や社会的立場を築いていった感があり、それに安らぎも感じていたということ。

③ 国が始めた戦争に苛立ち（いらだ）や納得できない気持ちを抱えていたが、図らずも戦争が仕事上の利益や地位をもたらして豊かな生活を享受するようになると、反戦の思いを口にすることもなくなり、特高とは無縁の生活になっていったということ。

④ 開戦当初は戦争特需で豊かな暮らしを手に入れ、社会的な信用も得てそれなりの地位を築くようになっていたが、いよいよ戦争が激化するにつれて工場も空襲の標的とされるようになり、夫婦の生活も余裕のないものに変わらざるを得なかったということ。

⑤ 国民の一人として日本の勝利を願う気持ちもあったが、次第に自分たちの暮らしが調い、ささやかな幸せを手に入れるにつれてそれを守りたい気持ちが強まり、市民としての生活や徴兵された人の命が戦争で犠牲になることを厭う（いと）ようになったということ。

問４　傍線部Ｃ「どうして、そういう気になるだろうかね。」とあるが、このように安子が口にした理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 24

① 周囲の人たちは皆、日本の勝利を疑わず戦争へと突入していこうとしているにもかかわらず、近所の目をはばかる様子もなく縁起でもないことを断定口調で言いきる夫に、危うさを感じていたから。

② 国のために身を捧げ（ささ）ようという気にもなれず、日本がアメリカに勝てるとも思えないのに、この国はどうやら本気で戦争を始めようとしているらしいことを思い、暗澹（あんたん）とした気持ちになったから。

③ 日本が次第に軍事国家の様相を呈してきたことに不安を抱いてはいたものの、まさか本当に戦争を始めるとは思っていなかったために、想定外のことに驚き憤りを口にせずにいられなかったから。

④ 戦争一色に染まっていく空気になじむことができず、冷めた目で傍観している自分たち夫婦が世間の感覚と乖離していることに後ろ暗い気持ちを抱きつつも、簡単に沸き立つ世の中を軽蔑せずにいられなかったから。

⑤ 夫は日本が戦争に負けることを確信しており、自分はやすやすと同意する気にはなれないでいるものの、今まで夫が予想する通りに世の中が動いていくのを見てきたため否定しきれなかったから。

問5　波線部a～eの内容や表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。　25

①　a「南瓜の葉が夜露に生き生きとなったように旺盛に葉をひろげていた」という表現は、人間の営みとは関わりなく生命力にあふれる植物の様子を描くとともに、静かな月夜の描写と合わせて昨日までの状況が嘘のような平穏な時間が不意に訪れたことを感じさせる。

②　b「へえ、と言ってちょっと彼をからかうような目をした」という表現は、山水の掛け軸という買い物に、中年らしい裕福な市民然とした生活を求めるようになった夫の俗っぽさを感じ取り、軽く揶揄する妻としての心情を表している。

③　c「この場の空気をそっとしておきたいものもあるのだった」という表現は、夫が妻である自分にも外見をつくろうよう命じてくることに辟易する一方で、世間体を気にするあまり、夫の思いを無下にして、夫に不機嫌になられることを恐れる様子を描いている。

④　d「この頃色艶のよくなった頬」という表現は、戦争で日本の国全体が貧しくなっていく中、武二の生活はむしろ安定したゆとりのあるものになり、家庭や工場での立場も確かなものとなって、中年期の男性として充実しきった様子をうかがわせる。

⑤　e「却ってどこかで気楽になった」という表現は、自分たちが世間の人から悪く思われるのではないかという不安や、その思いを夫が共有してくれないことへの寂しさなどから解放され、素直に夫婦の情愛を感じられるようになった様を描写している。